

桜観音

むかーし、あったと。

一人の馬喰が馬の競市の帰りで、得意気に辰街道あたりを南に向かって歩いていったと。あり金全部使って最高の馬買って、

「こつたら名馬どこ探してもいねがんべ。見れば見るほどいい馬だ。そうだ、名前つけてっやぺな。……うーんと、おめえはアオだ。アオ、ええ名前だあ」

などと、足どりも軽く馬子唄を歌いながら家さ向かって急いでいたんだと。

しばらくして義家桜（現在は西山辰街道の大桜）のところまで来たならば、今まで元気だったアオが急に動かなくなつて、ぶつ倒れちまったんだと。

「アオどうしたあ。どっか痛えのか」

と声をかけた。体さすつてやつてもまったく動かねえで、今にも死んじまいそうに見えた。

「ダイジかあ、アオ元気だせ」

つて必死に声をかけ続けた。それでも、ちつとも変わらんでよ。

すっかり日が暮れちまつて、困り果てた馬喰は、

「もう観音様に拝むしかねえ」

と、馬の守り神である馬頭観音に願掛けたんだと。

「観音様、お願えだあ。どうかオラのアオの病を治しておくんなんしよ。治ったら、必ず桜の根元さ、観音様おまつりしますから、よろしくお願えします」

と一晩中くり返しながら拝み続けてたんだと。

だけんども、旅の疲れと看病の疲れでついウトウトしちまつて、一番鶏の声で慌てて目え覺ましたと。

「アオ、苦しくねえか」

と声かけてやったら、不思議な事もあるもんだ。今までぶつ倒れてたアオ、すつくと立ち上がり一度でつかくいなないたと。馬喰、夢じやねえかとたまげちまつて、両手合わせて涙こぼしながら、何度も何度もお礼を言い約束を誓ったんだと。

今でも西山辰街道の大桜の根元には「桜観音」と呼ばれる馬頭観音が草に埋もれるように祀られています。

おしまい